

SUDA Kumiko

須田 久美子

富山大学芸術文化学部講師

◆自己紹介

2018年9月に着任しました。石川県金沢市出身、学生時代以来長く関西で暮らした後、北陸に戻ってきました。専門はイギリス文学、英語教育関連分野です。

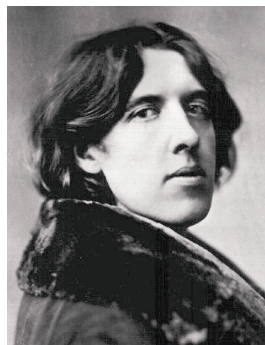
◆オスカー・ワイルドについて

All art is quite useless.

すべての芸術はまったく無用のものである。

(『ドリアン・グレイの肖像』序文より)

これは、19世紀後期の作家オスカー・ワイルドの小説『ドリアン・グレイの肖像』(1891年版)の序文にある言葉です。なにか反感を覚えるような文ですが、よく考えてみると、私たちの人生を彩り豊かにしてくれるものは、「無用のもの」、つまり「役に立たない」ものが多いのではないのでしょうか。美しい器や道具、調度品、住まい、絵画や音楽、詩がなくても人は生きていけるかもしれません。ですが、それでは人生の甲斐がありません。実は、ワイルドのこの言葉に反感を覚えるべきは、物事を役に立つ立たないで測り「芸術なんて役に立たない、そんなものを学んで一体何になる」、と俗に言う人たちなのです。彼が伝えるのは、芸術は存在するために何の言い訳も必要なく、その存在自体に価値があるということでしょう。この言葉は、本当に豊かな生活、社会とは何だろうか、今の私たちに考えさせてくれます。



オスカー・ワイルド

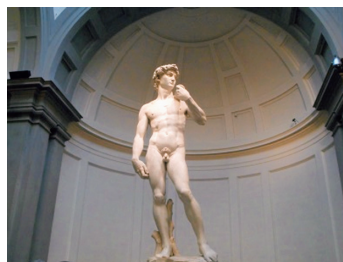
◆研究についてーイギリス文学

ルネサンスは19世紀に発見された、としばしば言われます。シェイクスピアはイギリスのルネサンス期に活躍した劇作家・詩人であり、その『ソネット集』は珠玉の詩集として知られます。それより約三百年を経た前述のワイルドの作品は、これに着想を得たものと考えられます。また同様に、著書『ルネサンス』で知られ、ワイルドと縁が深い作家ウォルター・ペイターは、ルネサンス期の芸術について論ずる中で、ミケランジェロの詩について記しています。ミケランジェロもシェイクスピアも、その内容が物議を醸す歴史を経たソネット集に新たな光が当てられたのは19世紀のことでした。ワイルドとペイターがそれぞれ、巨匠達の詩をどのような眼差しを向けて解釈していったのか、そして、その解釈を自身の創作の契機へといかに昇華させていったのか、そのあたりに着目しています。これに関するこれまでの研究内容は、以下のような形で発表しています。

◇"Your days are your sonnets': *The Picture of Dorian Gray* and Oscar Wilde as Critic of Shakespeare's *Sonnet*"

『比較文化研究』第131号 pp.1-16 日本比較文化学会関西支部 (2018年4月)

◇「ペイターのミケランジェロ論」『文学と比喩』英宝社 (2019年度出版予定)



ミケランジェロ作『ダビデ像』
(2017年撮影)

◆研究について—英語教育関連分野

Higgins: A woman who utters such disgusting and depressing noises has no right to be anywhere — no right to live. Remember that you are a human being with a soul and the divine gift of articulate speech; that your native language is the language of Shakespeare and Milton and the Bible. . . .

ヒギンズ：こんなにも不愉快で、気の滅入るような音を出す奴はどこにいる権利も一生きる権利もない。覚えておけ、お前は魂と、明瞭な話し言葉という神から授かった贈物をもった人間なのだ。お前の母国語はシェイクスピア、ミルトン、聖書の言葉なのだ。

(『マイ・フェア・レディ』より)

英語で書かれた作品を学習教材として扱う研究にも取り組んでいます。ジョージ・バーナード・ショーはワイルドと同郷・同世代の劇作家ですが、その『ピグマリオン』をもととしたミュージカル『マイ・フェア・レディ』の脚本を用いる授業を試みました。上記の引用は、暴言にも思えるセリフですが、英語に誇りをもつ言語学者ヒギンズが、正しく言葉を学ぶことで人は変身できる、との信念を伝えています。そして、「英語への侮辱の化身」たるイライザとの奮闘が始まります。英語の学習と人間の成長を結びつけたこの作品は、語学の授業にのぞむ大学生にとって直截に共感できる内容です。セリフの読解と、原作と比較・検討しながら学生たちが自分で考え問題提起することを通じての学習意欲の向上をねらいとし、その成果については共著の中に報告しています。

◇『『マイ・フェア・レディ』のイライザと共に学ぶ：読解力と学習意欲の向上を目指して』『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する』pp.83-92 英宝社 (2013年9月)
(大学英語教育学会2014年度学会賞実践部門を受賞)

また、扱い方次第で映画も良い学習素材となるとの考えのもと、大学生向けテキスト(共著)の出版に携わっています。映画の魅力に触れながら、あるいはクリティカルな目を開きながら、考えることができるようにと、そういう思いで取り組んでいます。



『陽のあたる場所』スクリーンプレイ社 (2015年)



『大学生に薦める映画 100選』映画英語アカデミー学会(「ブリジット・ジョーンズの日記」、「めぐりあう時間たち」、「欲望という名の電車」担当)(2017年)

◇その他出版(共著) *Disney Films and Secret Messages—Race, Ethnicity, Gender, Sexuality, and Disability* 英宝社 (2019年)

◆芸術としての文学

I would call criticism a creation within a creation.

「私は、批評を創作の中の創作と呼びたい」

(『芸術家としての批評家』)

ワイルドは、批評はクリエイティブな活動、一つの創作であり、作品に解釈を加えることは芸術活動そのものだと思います。この言葉の心の広い解釈をさしあたり許していただくこととして、学生たちも、ワイルドの作品を読みこれに解釈を加える試みを通して、英語のスキルアップのみならず、創造的な学習へと踏み出していけるのではないのでしょうか。ワイルドの短編小説を英語の授業で取り入れる試みについて、また、学生が作品を読みこんでいく過程で得たものを自分なりになんらかの形にして発表した様子について、それぞれ報告しました。

◇「オスカー・ワイルド作『幸福の王子』原文を用いたライティングおよびリーディング科目における実践報告～"re-reading"を目指して」『教職課程研究』第4号(pp.19-26) 北陸学院大学・短期大学部教職課程運営部会 (2017年9月)

◇研究発表「オスカー・ワイルド作『幸福の王子』原文を用いた授業の実践報告—創造力と英語力の伸長」JACET関西支部文学教育研究会12月例会(2017年2月)



学生による和訳付絵本 (2017年)

文学作品の中の英語には、何十年、何百年経っても変わらない輝きがあり、私たちを惹きつけます。作品がもつ豊かな可能性は、きっと、学生たちの好奇心、創造力を引き出すことでしょう。